

# ③ 本牧ジャズ祭

## オリジナルな文化づくりへ

■ 渡辺光次

### 1 はじめに

「YOKOHAMA本牧ジャズ祭」は、十五年間の歴史をもつ横浜夏の風物詩のひとつ。毎年八月の最終日曜日、中区の本牧市民公園野球場の空の下、踊ったり、日焼けやバーベキューを楽しみながら、一日ゆっくりとコンサートを楽しもうというイベントだ。

企画運営に当たるのは、一般市民のボランティアたち。彼らは十五年前、中区役所の呼びかけに集まり、当時の不毛といってもいい、横浜の音楽文化状況に活力を与えようと、このジャズ祭を誕生させたのである。

二回目以降は、市民側が主導権を持ち、中区役所との二人三脚は、今日まで継続されている。

この十五年間の横浜ジャズ文化を振り返ると、区が地域文化づくりの種をまき、市民が育てた「本牧ジャズ祭」の芽を、市が、全国でも最大級の市のジャズイベント「横浜ジャズプロムナード」という花に咲かせたという、市民と行政によるひとつの市民文化熟成パターンが実証されたような気がする。

そして今、その原点たる本牧ジャズ祭は、当初の目的を達成し、次なる目標をいかに見いだすのかという問題に直面している。

### 2 一人と音楽の「ごった煮」スタイル

本牧ジャズ祭の最大の特徴は、誰もが自由に参加できる組織づくりにある。ジャズ祭会場や地域情報紙などでの呼びかけに、集まってきたボランティアスタッフたちは、住む地域も、仕事も、音楽に対する知識も、年齢も、かわるきつかけも一切バラバラだ。

それでも気軽にジャズ祭づくりに参加できるのは、作業ノウハウが確立されているためだ。この体制は、第一回目にその基礎が作られた。

区の担当者は、ジャズ祭づくりを、特定の専門家や既成のグループに任せず、「市民の手づくり」で実現することを目指した。そこで実行委員会の牽引役としてイベントづくりに必要な職能を持つ「プロ」たちに、ボランティアとしての参加を呼びかけたのである。

ジャズミュージシャンや、バンドのマネージャー、ジャズ雑誌の広告担当者、企画会社のスタッフ、ライブハウスの経営者、タウン誌の編集者といった、市内で活躍するプロやセミプロたちが、ここで初めて顔を合わせ、作業の基本づくりを担うことになった。そんな実行委員会は、「人づくり」の場にもなっていた。

年を追うごとに各セクションの作業スタイルは洗練され、主導権はアマチュアらの手に渡され、年々新人たちへと受け継がれる体制ができてきたのである。スタッフの中には、プロたちとの交流の中で、イベントづくりに関心を深め、自ら「プロ」を目指す者も出てくるほどだった。

本牧ジャズ祭の音楽スタイルの特徴は「ジャズ」に固執せず、「ロック」あり、「サンバ」あり、「ワールドミュージック」ありという「ごった煮」にある。

このスタイルの決定には、実行委員会を二分する議論があった。

そもそも区の担当者がジャズ祭を企画するきっかけは、フリージャズのミュージシャンとの出会いにあった。折しも戦後以来、接収され続けてきた本牧米軍住宅地の返還を翌年に控え、米軍住宅地内で、前衛的な「フリージャズ」コンサートを行おうという青写真が準備されていたのだ。

しかし、実行委員会が結成された時、「状況に合わないのでは」と、新メンバーの中から、「ごった煮」案が提案された。

「フリージャズ」は、音楽の基本形式にとらわれない前衛的スタイルだが、新しくはなく、観客は一部の熱狂的マニアに限られる。

- 1 はじめに
- 2 一人と音楽の「ごった煮」スタイル
- 3 野外会場の魅力と欠点
- 4 変わり始めた音楽文化状況
- 5 地域でのオリジナルな文化づくりへ
- 6 「批評の場」の必要



一方、「ごった煮」案は、「クロスオーバー」や「フュージョン」といった、ロックや民族音楽など多様な音楽性と融合する、当時のジャズの方向性を、イベントとして先取りしようというもので、幅広い音楽ファンと一緒に楽しめるといふ、これまでにない可能性が秘められていた……。

当時の横浜では、ジャズやロックは身近な音楽ではなかった。行政関係の会館やホールでは一切演奏が許可されず、唯一の拠点であった横浜野外音楽堂も、横浜スタジアム建設で取り壊されていた。

横浜では触れることのできない、多様で新しい音楽を取り入れることで、不毛な横浜の音楽状況を活性化しようと、「ごった煮」案が選択されたのである。

### 3 野外会場の魅力と欠点

様々なジャンルの音楽が、次から次へと脈絡もなく登場するジャズ祭に、観客が違和感を覚えないのは、野外という会場の魅力が大きく作用しているからだ。

夏休みの最後の日曜日、野外の開放感に浸りながら、グラウンドにシートを敷いて、寝転がったり、腰を下ろしながらのんびりと一日を過ごす。こんな「ピクニック」スタイルが、どんな音楽でも抵抗なく受け入れられる自由な雰囲気を作り出している。

こうした「開放性」が、本牧ジャズ祭をより親しめるものにし、音楽ファン以外の共感も得、毎年約三千人の観客と延べ五百人以上のボランティアの獲得、そして十五年間の継

続を可能にしてきたのである。

しかし、反面、会場が野外であることは、本牧ジャズ祭にとって多大なリスクを背負い込むことにもなっている。

第一回日から会場にしてきた本牧市民公園野球場は、当初、米軍住宅内のフットボール場が、有料コンサートへの貸し出しを認めないことから利用することになった場所。埋立地の工業地帯の中にあることなら、騒音問題や、観客席の設置、フェンスを設けるなどコンサートに必要で十分な条件を満たしていた。そして中区役所の協力で、本牧ジャズ祭は、いわば特権的に会場使用ができるようになったのだが、この会場でジャズ祭を続けるには経済的負担があまりにも大き過ぎるのだ。何も無いグラウンドに、ステージや照明、音響設備などを設置するためには、約六百万円の予算が掛かる。スタッフは全員ボランティアのため人件費は掛からないが、その他ミュージシャンの出演料、ポスターやチラシの印刷費、諸活動費などを合わせると一回開催するのに一千万円を軽く超す経費が掛かる。

これをまかなうためには、約三千数百円のチケット料金で、二千五百人の観客動員があっても足りず、さらに約五百万円の協賛資金が必要となる。

しかしその収入も、バブル経済の頂点を指した過去十年間なら良かったが、その崩壊後は、企業の台所事情などから困難を極めていく。ジャズ祭に継続的に資金援助をした企業も、この数年間のうちに大幅に減少するなど、厳しい状況が続いている。

ジャズ祭経営は、一回行うごとに出た赤字

を次の資金に回し、やりくりしていく自転車操業。一度、大雨や台風などに襲われれば、大幅な資金援助がない限り、継続は不可能なのだ。せめて無理をしない予算で、規模を小さくして別の場所で実験的な活動を、と思っても、ここを一度出ると復帰できなくなる。そのため、毎回のジャズ祭ではどうしても利益を生むことが必要となる。集客力のある有名アーティストに安い出演料で出てもらうなど、売り上げのことを常に考えねばならなくなる。

しかし、こうなると一般興行と変わらないものに陥る危険性がつきまとうのである。

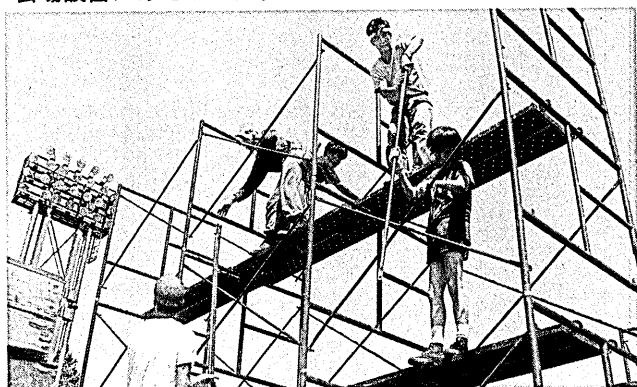
### 4 一変わり始めた音楽文化状況

八一年から九〇年にかけて、本牧の米軍住宅地は、新しいショッピングセンターなどに変わり、桜木町駅前には、みなどみらい21地区が誕生するなど急激な都市状況の変化につれ、貧困だった横浜の音楽状況も、驚くほど豊かなものへと変わっていった。

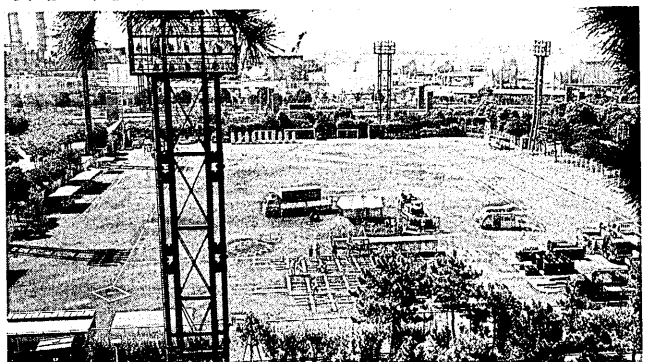
新しいFM局が誕生し、国内をはじめ世界的なミュージシャンの演奏や商業主義にのらない質の高い音楽までも、身近に触れられるようになった。

その間に、旭区をはじめ、港北や港南区などでも市民と行政の協力で同様のジャズ祭が開催され、中学や高校の学内でもジャズが動き出した。また横浜JAZZ協会や、「横浜ジャズプロムナード」が市の代表的なイベントとして誕生するなど、「ジャズ」は横浜の代名詞として定着してきたのである。

会場設営にあたるスタッフ



会場の本牧市民公園野球場



こうして、本牧ジャズ祭の当初の目的は十分に果たされた。ジャズ祭に選ばれる出演者たちは、すでに市内のそここで見たり聴いたりできる状況にまでなっていた。

その反面、ジャズ祭の音楽的なインパクトは次第に失われ、音楽に対する実験性や、批評性は希薄化していくことになる。そして、「音楽文化の活性化」という大義名分を果たしたスタッフたちにとって、ジャズ祭は次第に、「続けるために、続ける」ものとなり、「こった煮」音楽は、単に実行委員の好みを反映するものになろうとしていた。

## 5 一地域でのオリジナルな文化づくりへ

横浜に「既製の文化」を持つてくる時代は終わり、地域でのオリジナルな文化づくりに着手しようと、今年、十五周年を迎えたジャズ祭は、次のような試みに挑んだ。

①出演者の選定には、多少の集客力は落ちても批評性や実験性を取り戻すため、新しい文化性を表現できるアーティストを選ぶ。また、当日の会場に、セカンドステージを設け、地元を中心に活躍する若いアーティストたちを取り上げ、交流を図っていく。

②広報活動を充実させ、ミニコミ誌（B5判八頁）を毎月発行し、実行委員会のメンバー一人ひとりが、それぞれの言葉でジャズ祭を語り、それをジャズ祭のメッセージとして、市内のジャズ喫茶やレコード店などを通じて広く伝えていく。

③会場内に在日外国人らによる国際色豊かな

屋台料理などを出してもらい（これは準備不足などで実現できなかった）、さらに地域周辺の福祉施設や外国人留学生などとの交流を図り、地域に根づいたジャズ祭づくりを試みる。地元のショッピングセンターの一角でも、ジャズ祭出演者によるプレイイベントの開催も行う。

「横浜」を意識した新しい文化交流の可能性を見いだすことで、地域の中の新たな観客との出会いを開拓していこうという試みだった。

そしてこの実験性を支えるため、有志を募り、赤字の場合の補てん対策が工夫された。結局、財政的には、百万円を超える赤字を有志が負担することになってしまった。

現在のジャズ祭では、一方で、経済的な負担を軽減できるような「野外音楽堂」の建設要求が切実なものになっている。

せめてステージ設営費だけでも軽減されれば、その負担は大幅に少なくなり、地域のオリジナル性を意識した、より実験的なプログラムも可能になるのである。

## 6 「批評の場」の必要

「文化」は生きものである。「継続するかたち」だけに意味があるのではない。

今、本牧ジャズ祭の活動が、時代の経過の中で、その存在理由を問われているように、「今、何を表現するのか」という思いや志を失ってしまったえば、すぐに形骸化してしまうものなのだ。

一方、行政の芸術文化への関心と取り組みは、「出来上がったものへの継続性」に偏り、金銭や場所の援助だけを繰り返してきたのではないだろうか。

特定の活動への偏った支援は、行政への依存体質をつくり、活動の「志」自体を行政の論理に矮小化（わいしょうか）しがちになる。また一方で、観光やシテイスールスという経済的視点に結びつけられ、観客動員やマスコミへの露出度などに基づく、短絡的で功利的な評価に終始してしまう。

地域文化はとかく、それにかかわる人間だけで閉鎖しがちで、その表現が広く人々の目に触れ、「客観的評価」をもたらすことはほとんどなかった。それが行政と特定の活動とが、密室関係に見られてしまう要因にもなってきた。

今、必要なのは「地域性」を閉ざされたものにせず、外に広げてゆく文化的視野を育むことではないだろうか。

そのためには、行政の役割として、個々の文化活動を客観的にとらえ、文化活動を担う人々と観客である市民が、表現を切磋琢磨（せつさたくま）してゆけるような「批評の場」づくりを担うことが期待されると思う。

それは、過去の数々の文化活動の実績を取り入れながら、さらに発展させる「まだ見ぬ文化」が芽を出す土壌づくりにもなるのではないだろうか。

△本牧ジャズ祭実行委員・編集プロダクション デイ代表▽

